

今週の為替相場見通し(2018年10月9日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		113.53 ~ 114.55	113.72	112.00 ~ 114.00
ユーロ	(ドル)		1.1463 ~ 1.1629	1.1520	1.1350 ~ 1.1650
(1ユーロ=)	(円)		130.61 ~ 132.46	131.00	129.00 ~ 132.50
英ポンド	(ドル)		1.2922 ~ 1.3129	1.3125	1.2950 ~ 1.3200
(1英ポンド=)	(円)	*	147.20 ~ 149.43	149.22	147.00 ~ 150.00
豪ドル	(ドル)		0.7042 ~ 0.7236	0.7049	0.6900 ~ 0.7200
(1豪ドル=)	(円)	*	80.00 ~ 82.48	80.20	79.00 ~ 82.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 鶴田涼平

(1)今週の予想レンジ: 112.00 ~ 114.00 円

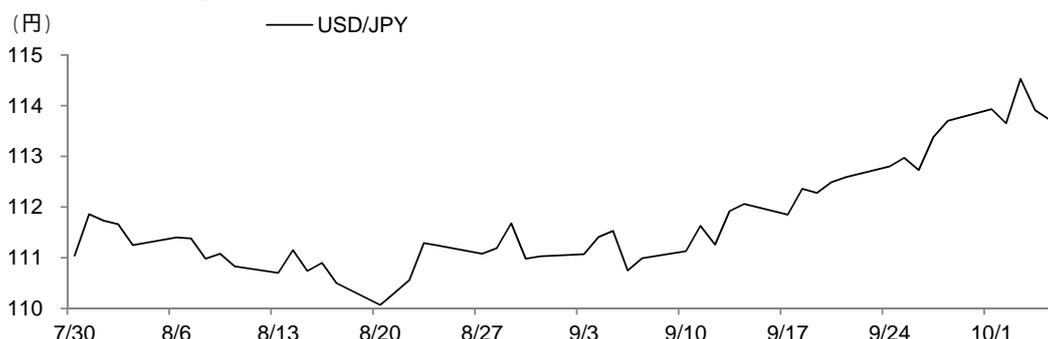
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、往って来いの展開。週初日に113円台後半でオープンしたドル/円は、米国とカナダの間で行われていた北米自由貿易協定(NAFTA)再交渉が合意に至り、リスクセンチメントが改善する中、イタリア財政問題への懸念を背景としたユーロ売りドル買いの流れも相俟って114円前半まで上昇。2日はパウエルFRB議長による講演を控える中でドル売りが先行し、週安値となる113.53円をつけたが、その後パウエル議長の「緩やかな利上げ継続を支持する」「景気は非常にポジティブな見通し」との発言が伝わり113円台後半まで反発。3日は再び週安値をつけたが、「イタリア政府が2021年に財政赤字の対GDP比を▲2.0%まで圧縮することを目指す」との報道を受けてイタリア財政懸念が後退すると、ドル/円は113円台後半まで上昇。米9月ADP雇用統計が予想を上回り、また米9月ISM非製造業景気指数が市場予想に反し前月から改善すると114円台半ばまで上伸。4日は米10年国債利回りが7年ぶりの水準に急伸したことを受けて年初来高値となる114.55円まで続伸したが、金利上昇を嫌気して米株が下落に転じると113円台半ばまで反落。5日は、米9月雇用統計の発表を前に114円ちょうどを挟んでレンジ推移。その後発表された9月非農業部門雇用者数変化は市場予想を大きく下回る一方、8月分が大幅に上方修正されたことに加えて失業率も市場予想以上に低下したことで、114円台前半まで一時上昇。しかしながら米株が軟調推移となるとドル/円はじり安の展開となり、結局113円台後半で越週した。

今週のドル/円相場は上値の重い相場展開を予想する。先週末発表された米9月雇用統計は非農業部門雇用者増加数が市場予想を下回る内容となるも、失業率は市場予想以上に改善する内容となり、足許のFRBの政策スタンスに特段影響なくドル相場への影響も限定的との認識。先週のドル/円相場が年初来高値を更新する展開から下落へ転じた主因は約7年ぶりの水準まで高騰した米長期金利である。トランプ米政権が繰り広げる貿易戦争懸念やイタリア財政懸念が後退する中、FRB高官によるタカ派発言が散見されたことで一時期よく耳にしたゴルディロック相場の雰囲気マーケットで漂っているようにも感じられる。しかし、既に株式相場では米金利上昇に対する警戒感が漂い始め、今年初めに起きた米株急落局面がそうであったように、高水準で推移する米金利が心地よく受け入れられなくなるのも時間の問題。政治リスクが一旦落ち着いた中、材料探しにファンダメンタルズへ注目が移ることが予想されるものの、米金利が上下両方向どちらに動こうとドル/円のサポート材料とはならなさそうだ。今週のドル/円は基本的に上値の重い展開を予想する。

(3)先週末までの相場の推移

先週(10/01~10/5)の値動き: 安値 113.53 円 高値 114.55 円 終値 113.72 円



3. 英ポンド

(1) 今週の予想レンジ: 1.2950 ~ 1.3200 147.00 ~ 150.00 円

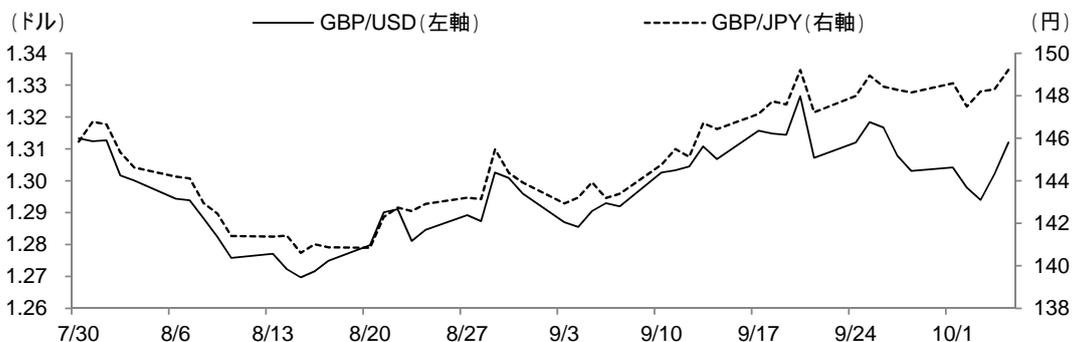
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、対ドル、対円で、下押し後反発。対ユーロでは、高止まりからの上昇で、3か月半ぶりの高値を更新した。ポンド軟調先行は、全般的にはユーロ安に連れた値動きのように見えた。引き続き、伊予算(経済財政計画)を巡るEU(欧州委員会)との駆け引きを巡る不透明感が、ユーロの重石になった。2日、欧州時間朝のポンド急落は、対ドル、対円、対ユーロで全面安に振れており、値動きからはポンド/円が主導したように見えたが、残念ながら、要因を特定することはできなかった。2日には、英与党保守党の党大会で、ジョンソン前外相がチェッカーズ提案(7月にメイ内閣がまとめた「将来の英とEUの関係」白書)の放棄を訴えたが、首相の辞任要求にまでは踏み込まず、自らの首相就任の意欲も示さなかったことで、市場には一定の安心感が広がったものと思われた。3日には、米連銀パウエル議長が、「中立金利」を超えて利上げを継続する可能性を示唆、米10年国債利回りは7年ぶりの高水準まで上昇(国債価格は下落)し、ドル全面高を誘った。ポンドも翌4日のアジア時間朝までに、対ドルでこの間の安値となる1.2922まで下押ししたが、ポンドの受けた影響は小幅、かつ一時的にとどまった。4日欧州時間以降のポンド上昇は、英のEU離脱交渉を巡る楽観の台頭が追い風になったものと考えられた。トウスク欧州閣僚理事会議長は、英に対し、カナダ型の自由貿易協定に、安全保障政策や共通外交政策などの特別合意を盛り込んだ、所謂、「カナダプラス プラス プラス」型の関係構築を提案(4日)。英、EU双方の離脱交渉関係者が、4日遅く、「合意は非常に近い」と語ったとの観測報道などが聞かれた(報道が聞かれたのは翌5日)。

今週の英ポンド相場は、軟調を予想。対ユーロで0.88を上抜け、3か月半ぶりの高値を更新した値動きには意外感もあり、テクニカルに0.87水準を目指したもう一段の上伸も想定はできる。対ユーロ主導のポンド高が続けば、ポンド/円の150円乗せも射程に入り、そうなるともう一段のポンド上押しも考えられなくはないだろう。ただ、対ユーロでのポンド堅調は、上述、伊予算を巡るユーロ側の事情に負うところが大きく、ポンド全面高をけん引するほどの影響力はないものとする。また、トウスク欧州閣僚理事会議長のカナダ型自由貿易協定の提案に、強硬離脱派の領袖の一人であるリースモグ議員が賛意を示したのにも意外感があった。仮に自由貿易協定で英とEUとが合意を結べるのであれば、ポンドには極めて明るい材料となる。ただし、具体的な提案の中身を精査すれば、両者の隔たりは引き続き大きく、現時点で「同床異夢」の感は免れない。EU側が、北アイルランドを単一市場/関税同盟に残すことで、アイルランド/北アイルランド国境問題の解決を志向しているのに対し、リースモグ議員を議長とする欧州研究グループの提案は、北アイルランドを「共通生物安全区域(農産物などの規格をEUと統一する)」として残すだけで、原産地証明や関税徴収などは、既存の付加価値税納付の仕組みを基に、最新のテクノロジーを採用することで、(物理的な)国境における検査の一切を排除できるとしている。耳障りの良い「合意近し」の観測報道(特に英語報道)が、具体的な交渉の過程で、何度も失望に変わってきたこれまでの経緯を振り返れば、安心するのはまだまだ時期尚早と言えよう。離脱交渉に対する楽観が、今般も失望に変わるのであれば、ポンド/円も、150円を上抜けて続伸する可能性よりも、150円に押し戻されて、反落する可能性の方が高いものと見込む。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/01~10/5)の値動き: (対ドル) 安値 1.2922 高値 1.3129 終値 1.3125
(対円) 安値 147.20 高値 149.43 終値 149.22



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.6900 ~ 0.7200 79.00 ~ 82.00 円

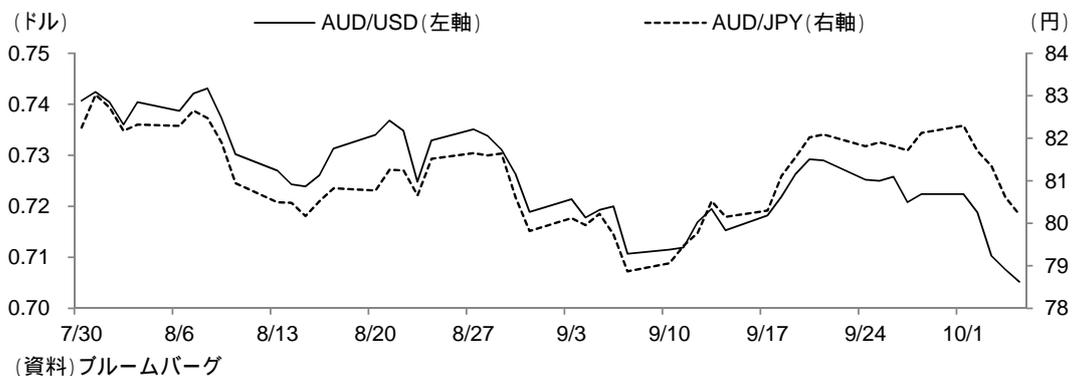
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は今年の安値を更新し0.7042まで下落した。1日は祝日でシドニー休場の中、豪ドルは0.72台前半で始まり、特段の材料はなく0.72台前半で揉みあいとなった。翌日、豪州準備銀行(RBA)理事会では政策金利1.50%の据え置きが発表されたが、市場予想通りで豪ドルへの影響は限定的。RBA声明文は「低金利が経済を支援・2018年と2019年のGDPは平均で3%をやや上回る・住宅市場はシドニーとメルボルンで鈍化・賃金の伸びは依然低水準」などが示され、前回に比べ大きな変化はなかった。その後、財政懸念が燻るイタリアから下院予算委員長の「自国通貨に戻せば多くの問題が解決する」との発言が出ると、リスク回避ムードとなり、豪ドルも0.71台半ばへ下落した。3日、豪州8月建築許可件数は予想より弱い前月比▲9.4%のとなると豪ドルの上値は重く、更に予想を上回る米8月ADP民間雇用者数や高水準の米ISM非製造業指数を受け主要通貨に対してドル買いが広まると、豪ドルは0.7100近辺へ下落した。4日、豪州8月貿易収支は予想より高い黒字幅ながら材料にはされず、豪ドルは0.70台後半でもみ合いが継続。5日の豪州8月小売売上高は予想対比若干強めの内容も、引き続き豪ドルの上値は重く、米9月雇用統計後に今年の安値となる0.7042をつけた。豪ドル/円相場は82円台から80円ちょうど近辺へ下落。ドル円は週を通して114円を中心にレンジ内で推移したものの、豪ドルがドル買いの流れから軟調に推移したことを受け、豪ドル円も継続して下落し、週後半金曜日には80円ちょうど近辺まで下落した。

今週の豪ドルは、上値の重い展開の継続を予想する。豪ドルは、米中間の通商問題、米国の利上げ路線継続観測、弱めの国内指標等が重なり、上値の重い展開が継続している。更に英国のEU離脱交渉の行方やイタリアの財政不安なども同時に懸念材料となっており、ドル買いまたリスク回避の反応で、先1年は利上げが見込まれていない豪ドルは売られ易い環境にある。株式市場が安定的に推移している限りは急落は想定しづらいものの、上記のように複合的な要因で豪ドルは弱含んでいるため、反転上昇のきかっけはつかみづらい。特に今週は国内で重要な指標等の発表が予定されていないことから、通商問題他海外要因を睨みながら上値の重い展開となろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(10/01~10/5)の値動き: (対ドル) 安値 0.7042 高値 0.7236 終値 0.7049
(対円) 安値 80.00 高値 82.48 終値 80.20



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。